

このたびの宗教団体初の電子ブック専用ストアは大変すばらしい事業であると思います。また早速、今宗議会における宗務総長演説、財務長演説がHPに掲載されるなど、宗門のネット環境における広報活動が充実し、大変期待を持つところでもあります。刻々と変化していく現代社会において、スピード感を持って、様々な方便を用いて宗門の教化活動を模索していただきたいと思います。

ところで、日本の電機産業に社会や文化に大きな変化をもたらすイノベーション（革新）が起きにくくなったことについて、ソニーのゲーム機プレイステーションの「生みの親」として知られる久多良木健氏が、

「研究開発をしている人間は5年先、10年先を見ようとするものだが、会社は春モデルとか秋モデルとか。目先のことしか見ようとしなない。長期のロードマップ（工程表）を考えられる人、大きな流れを見通すことができる人が少ない。」

「決めた通りでないで困るといふ人がたくさんいて。柔軟性や多様性に欠けるきらいがある。」

また、「役員会に諮っても自分たちが聞いたことのあるような案件なら安心して通すけれど、初めて聞くようなアイデアだとまず門前払いとなる。」と語っておられました。

私たちの宗門行政にも、このようなきらいはないでしょうか。本山組織内のみならず、本山と教区、普通寺院の関係においてもそういう風潮が残っていないでしょうか。宗門内外の諸問題において、既得権を守るために、革新を起こせないでいることが多々あるのではないのでしょうか。

真宗教化センター設置においても、私は今後の宗門教化の中心拠点として大変期待するところでもあります。しかし、教化センター構想が既存の体制や思考の延長線上で考えているならば、期待感ばかりが膨らみ、センターに問題や責任ばかり集中して、十分な効果が発揮できないのではないかと危惧します。そうならないために、今の組織のあり方も含めた、適切な人材と人員の確保が重要であると思います。

地方では人件費が高すぎるとの批判がよくありますが、私自身は一概にそうとばかりは言えないと思っています。これは、総長演説で「宗門の動き、単純な事がらが、思いのほか、各寺院、住職、坊守、門徒の方々に、伝わっていない」というように、宗務役員の実態が理解されていないと感じるからです。このことは、より丁寧な説明と対話を

尽くしていただきたいと思います。

しかし、実情は、会計監査委員長の報告にもありましたように、業務の複雑化や多量化により、十分な人材と人員の確保がなされていないと思います。その結果、宗務役員は激務に耐え、宗門に元気が出ないことの、一つの要因となっているのではないのでしょうか。もちろん、経費を抑えるのは当然のことで、会議費や出張旅費等の人為的経費等については、更なる精査をお願いしたいと思います。

しかし、元気の出る宗門にするには、社会に敏感にアンテナをはる余裕を持ち、真宗を通したメッセージを社会に発信するエネルギーが宗門人に必要だと思うのです。すべてとは言いませんが、今の宗務役員の勤務環境では難しいのではないかと思います。

この適切な人材と人員の確保について、どのように考えておられるのか、宗務総長には現況の所見と今後の構想を、そして財務長には財性面から見た、今後の必要人件費の適正なあり方についてお聞きしたいと思います。

また最後に、先の久多良木氏は

「ソニーに入社して最初の10年間は、ホントに好きなことがやれた。(中略)もう毎日が楽しい。会社が大学の研究室の延長のような感じで。」とも語られていました。私は研究部門とはこうあるべきだと思います。真宗教化センターにおける教学研究が、時の事情や組織に左右されない独立性を確保されることを要望して、私の質問を終わらせていただきます。

なお、短い時間でしたので、私の思いをすべて伝えることが出来なかったかもしれませんが、事前に通告書を出していますので、どうか丁寧な答弁をお願いいたします。